

喜多医師会病院 循環器内科

研究室紹介 260

喜多医師会病院は、昭和58年の開院以来地域医療を支援する病院として病診連携による一貫した質の高い医療の提供を目指してきました。病院は肱川あらしや日本三大鵜飼の一つとして有名な肱川中流に形成される大洲盆地のほぼ中央に位置し、大洲市は伊予の小京都と称される風光明媚な地域です。この地域の高齢化率は36%と高く、207床を有する喜多医師会病院は、循環器医療の重要な拠点として地域住民とともにその歴史を刻んできました。今年、丁度老朽化した旧病院より新病院へ移転の節目の年でありました。7月8日は新病院の落成式が予定されていましたが、平成30年7月豪雨により、その前日に新病院は肱川氾濫による浸水被害にあいましたが、とても予定どおり開院できるとは誰も想像しませんでした。甚大なる被害を受けた大洲地域住民への1日も早い医療の再開と受け入れを目指し、職員一丸となって復旧に努めました。その甲斐もあり無事に予定どおり7月18日に開院することができました(写真1)。

循環器内科診療

循環器内科は、当院の院長でもある住元巧先生を筆頭に5人体制で診療にあたっており、年間約200人を超える循環器救急患者の受け入れ及び500~600人前後の循環器疾患患者の入院加療をおこなっています。喜多医師会病院は開院当初より院内保育室の24時間受け入れ体制を完備するなど、女医や子育てをするコメディカルの働きやすい環境づくりにも取り組んできました。現に当院循環器内科の1人は女医であり、2人の子育てをしながらとても精力的に働いており、その働き振りにはいつも頭が下がる思いです。また、高齢の心不全患者を多くかかえる現状もあり、最近では心臓リハビリテーションや心不全緩和ケアへの取り組みを開始し、地域のニーズに応えるためコメディカル含めたチーム体制で試行錯誤を繰り返しています。

教育

喜多医師会病院では、循環器診療レベルの全体的な底上げを目指し、心電図検定(日本不整脈心電学会主催)取得に向けて病院全体で取り組んでいます。日々の心電図勉強会を2017年より始めましたが、とても驚かされたのはそのニーズの多さと多職種の参加でありました。勉強会には循環器病棟の看護師のみならずソーシャルワーカー・栄養士・放射線技師・臨床工学技士・作業療法士・臨床検査技師や近隣の消防隊まで多くの職種の方々に参加いただき、8月19日におこなわれた第4回的心電図検定試験を迎えました。今後も循環器診療の教育の一環として継続して取り組んでいく予定です。

臨床研究

当院の循環器内科は伝統的に臨床研究を重んじ、その結果を日々の日常診療に活かしてきまし



写真1◇新・喜多医師会病院



写真2◇集合写真 超音波検査技師とともに

た。特に心エコー検査に関しては、優秀な超音波検査技師に助けられ冠動脈血流速度測定から心不全に至るまで多くの報告をしてきました。まだ全国的にも数少ない、日本心エコー図学会認定専門技師の資格を有するソノグラファーが2人もいることはとても誇れることであり、当院の財産でもあります(写真2)。臨床研究に関しては、他病院ともコラボレーションしながら心不全・心血管イメージングを中心に患者に還元する研究をモットーに日々励んでおります。臨床病院であるため症例報告にも力を入れております。診断や治療に難渋した例や新しい知見が得られれば実臨床の貴重な参考例として活字として残すことを心がけており、そのリサーチマインドは当院循環器内科のよき伝統として今後も継承されていきます。

おわりに

わが国を先取りして超高齢化の進む地域において、時とともに変遷する地域のニーズに耳を傾けながら、これからも地域に根ざした病院であるべく住民とともに輝いていきたいと思っております。

<稲葉慎二>